

シリーズ・世界の図書館(2)

ハーヴァード大学ワイドナー図書館ほか

大熊 榮^E

1

ハーヴァード大学ワイドナー図書館の恩恵を蒙ることになったのは、1998年4月にマサチューセッツ州ケンブリッジへきて、一冊の本を探しはじめたのがきっかけだった。その本とはElaine Tarone 著 *Variation in Interlanguage* (1988, London: Edward Arnold) で、実はノースイースタン大学スネル図書館が話のきっかけになっている。

この大学はこちらへ来るにあたって当てにしていた大学のひとつだった。話せば長くなるけれども、97-98年に明治大学へ客員教授できていたブルース・ウォリンがそこにいて、訪ねることになっていた。

ワイドナー図書館について書こうとしながら、ノースイースタン大学の話になってしまうのは変な展開だが、ともあれ私はブルース・ウォリンを訪ね、これこれの本を探しているのですがと、とりあえず2冊のタイトルを示した。行政学が専門の彼にはまったく関係のない本であるにもかかわらず、すぐにコンピュータで図書館データベースへアクセスし、2冊のうちのひとつMiriam R. Eisenstein 編 *The Dynamic Interlanguage: Empirical Studies in Second Language Variation* (1989, New York: Plenum Press) のほうはスネル図書館にあることを突き止めてくれた。

アメリカ人のサーヴィス精神の旺盛さを目の当たりにしたのはそれからだった。もう一冊を探すために彼はわざわざ図書館へ私を連れて行き、

^Eおおくま・さかえ / 法学部教授 / 社会言語学

インフォメーション係に紹介した上で、本の探索を彼女に依頼してくれたのだ。彼女はただちにニューイングランド全体の図書館データベースへアクセスし、その本がコネティカットのどこかの公立図書館とワイドナー図書館にあることを調べてくれたのだった。公立図書館はともかく、ワイドナー図書館が私に利用できるかどうかという問題が浮上した。インフォメーション係もウォリンも懐疑的だったが、私としてはコネティカットまで探しに行く気はしなかった。

こうして私は日本を出るとき利用することなどまったく考えていなかったワイドナー図書館へ出向くこととなった。だめでもともとなので、ひとまずインターネットで情報を確かめてから（情報はほとんどなかったが）、ハーヴァードヤードへと歩いて行った。私のホテルからは20分ほどの距離だった。こちらへきて1ヶ月ほどはホテル暮らしだったのを、いまとなってはなつかしく思い出すが、それはともかく、実はワイドナーがハーヴァードヤードのどこにあるのか知らなかった。そこで、インターネットのホームページに出ていた写真の記憶を便りに、それらしい建物へ近づいていった。



ハーヴァード大学ワイドナー図書館

何段もの石の階段の上に太い石の円柱が威圧するように立ち並んでいる。大学のすべての建物の中で最も大きいと言われるだけあって、300周年記念中庭（ターセンテナリー・カドラング）へ入っていけばすぐに目につく。1636年にできたこの大学の300周年は1936年のはずだから、観光客にあまりにもよく知られている中庭はまだ60年の歴史しかないことになる。この中庭を見下ろす図書館はホレス・トランバウアのマスタープランで1913年に建設された。いくつかジョージ王朝様式のものがある建物群の中で、威風堂々の図書館はインペリアル様式とも、また古典様式とも言われている。これと対照的なのは、中庭を挟んで反対側に立つ優雅なメモリアル・チャーチだ。図書館と教会に囲まれた中庭は時に特別な空間に変身することは後から知った。ネルソン・マンデラへ名誉博士の称号を贈るような特別集会の舞台になるのだ。

確かにワイドナー図書館はこのあたりの大学図書館のようにすべての市民に無条件で開放されているわけではなかった。ただ幸いなことに、この図書館は外国のすべての学者に1年につき6日間だけ利用を許可していることがわかった。なにか身分の証明になる、例えば大学からの手紙のようなものを持っていけばいいのだ。私は明治大学国際交流センターに大いに感謝しなければならない。というも、アパートを借りる必要から、大学の資金援助を受けてこちらへ研究にきていることを証明する学長名義の手紙をファックスで送ってもらったばかりだったからだ。私はそれを見せて首尾よく図書館の中へ入ることができた。

忘れられないのは受付にいた小太りの中年男の顔だ。ここにしかない本を見たいという趣旨の挨拶をすると、いかにも誇らしげな笑みを浮かべた。ハーヴァードの誇りを私が初めて感じ取った瞬間だった。この街のひとはだれもがこの大学を誇りにしているのではないかと薄々感じてはいたが、その直観が中年男の顔によって証明されたというわけだ。彼は私が探している本をコンピュータで調べてくれ、チェックアウトされていないことを確認してくれた。だれかに借り出されていないで、アヴェイラブルの状態にあるという意味だ。ついでに言えば、英語の教員をしていて情けないと思うのは、チェックアウトなどというホテルでよく使うフレーズが図書館でも使われているのを初めて知って感心してしまう時だ。

図書館は11階建てといえいいのだろうか。地下2階と地上9階から成り立っているのだが、しかし通常のフロアと違う。書架の並ぶフロアがそれだけあるということで、その書架フロアはP1からP6までの地上部分と、AからDまでの主に地下部分とに分かれているほか、グラウンドフロア、ファーストフロア、セカンドフロア、サードフロアと呼ばれるフロアもある。かなり複雑な仕組みになっている上に、イースト、サウス、ウェストと呼ばれる区域がそれぞれのフロアにあり、例えば私が探している本はPS3、つまりP3のサウスにあるという具合だ。この仕組みが分かれば、コールナンバーと呼ばれる整理番号を見るだけでどのあたりに本があるか見当がつく。

しかし、最初はなにがなんだか分からない。恐る恐る進んでいく。どの階段を上ればサウスなのか、どこまで上ればP3なのか。そんなこともわからないしまった。しかしなんとか本があると思われる書架へと辿り着く。そこでまたしても驚いたのは、低い天井とぎっしり並ぶ書架、そして全体の薄暗さだ。書架と書架の間はひとが前を向いてやっと歩ける程度にしか空いていない。しかもそこはほとんど真っ暗で、裸電球がぶら下がっている。通路へ踏み込む前に電気のスイッチを入れなければならない。裸電球といい、スイッチといい、いかにも旧式なのだ。この古臭さはボストンの野球場フェンウェイパークに通じるころがあると思った。レフトスタンドの代わりにばかでかい塀がふさいでいる、あの不格好な野球場に、ポストニアンは不思議な愛着を示す。この書架でも、いちいち電気をつけたり消したりして本を探す不便さが保存されているのだ。最初は節電のためかと思った。しかし、そうではない。このあたりの、つまりニューイングランドのアメリカ人が、特に電気やものを大切にしているとは考えにくい経験を何度かしている。図書館にしても、ノースイースタンやタフツ大学の図書館などは、新しいこともあって、書庫は常に明るく照らされているし、コピールームなどは、ひとが入っていくと、ひとりでに明かりがつく。いちいちスイッチを切ったり入れたりする手間が省けるしかけだ。この便利さ、このモダンティ、そして使い捨ての消費文化こそ、アメリカが世界に、とりわけアジアに売り込んできた価値観のはずだ。そのアメリカを主導する頭脳を育てている大学が不便さと古臭さを保存している。

本が見つかる、今度は読む場所が問題だ。場合によってはコピーもしなければならぬ。読む場所は窓際にある作り付けの机とベンチだ。これも古めかしく、昔ヨーロッパで乗った寝台車のコンパートメントを思い出す。少しだけ隔離された感じのリーディングデスクで探し求めた本を読み出したのだが、ふと窓の外を見るとそこはマサチューセッツ・アヴェニューで、よくその前を通る酒場「グラフトン・ストリート」が眼下に見えた。なんの因果か、50の坂を転げ落ちながら、単身ニューイングランドくんだりへやってきて、侘びしくも薄暗い書庫の片隅で、だれも読みそうにない本を読んでいる。ピューリタニズムの精神をバックボーンとするこの大学の地霊が乗り移ったかのような錯覚を覚えた。私が本来いるべき場所はここではなく、あの酒場ではないだろうかという思いに悩まされながら、コピーを取るのが面倒というより、正直な話、どうやってコピーを取るのか分からず、ひとに聞く気にもなれないまま、若い学生のようにノートを取りながら本を読んだのだった。

図書館は平日朝の9時から夜の9時まで、土曜は9時から5時、日曜も正午から5時まで開いている。私は8時ごろまで粘って、まだ明るい初夏の街へ出ていった。帰り際にコピー機についてひとに尋ねると、地下に置かれているとのこと。トイレもそっこのほうなので、ついでに覗いて見ると、どこの大学図書館でも使っているようなコピー機だった。コピーカードを買うか小銭を使うかして、1枚10セントでコピーできる機械だ。

2

ワイドナー図書館の名前の由来は建設資金提供者にある。この建物は名前を残す代わりに資金を出すという、アメリカ式寄付方式の産物なのだ。

資金提供者の名はジョージ・D・ワイドナー夫人。これは文字どおりジョージ・D・ワイドナーの奥さんということで、彼女自身の名前はものの本に出ていないし、図書館のだれに聞いてもわかりそうにない。だんなでなく、奥さんが寄付したということは、彼女が未亡人だったということだろう。その後彼女は地理学教授ハミルトン・ライスと再婚して、ライス夫人と呼ばれた。

余談になるが、そのひととなりあまり知られていないのは創立時の寄付者で大学名のもとになったジョン・ハーヴァードも同じだ。ロンドンの肉屋の息子として生まれ育ち、ケンブリッジ大学エマニュエル・コレッジで神学を学び、家業を継いでいた彼が、なぜ資産を売り捌いて1937年にニューイングランドへやってきたのかはよくわかっていない。一説には巨額の借金を逃れるためだったのではないとも言われている。ともあれ、ニューイングランドのケンブリッジ村で牧畜業を営みはじめつつ、すでに1636年にそこにできていたコレッジに800ポンドの寄付をした。その結果、大学名が1638年にハーヴァード・コレッジとなったということらしいが、彼が書き残したものは手紙一通ないという。それほどによくわからないこのひとの銅像がハーヴァードヤードの中庭に立っているが、世間によくあるリアルな銅像と違い、これはほとんど想像の産物に違いない。

ワイドナー夫人の寄付の動機は1907年にハーヴァードを卒業した息子ハリーを記念するためだった。実際、建物の正面上部とマサチューセッツ・アヴェニュー側の両方にHARRY ELKINS WIDENER MEMORIAL LIBRARYという文字が刻まれている。事情を知らないひとはハーヴァードの偉大な学者の名前かなにかだろうと思うことだろう。建物の表と裏に同じ文字が大きく刻まれているところに、アメリカらしい現金さというか、世俗性というか、寄付の真意が窺われる。名前が残ればそれでいいのだ。

ワイドナー夫人は金を出しただけでなく、口も出したようだ。そもそもハーヴァードではゴア・ホールと呼ばれた旧図書館が手狭になり、建て替えが19世紀末から問題になっていて、そのための委員会がすでに青写真を描いていたのだった。それによると、膨大に膨れ上がった蔵書収容に備え、かつまた大学のシンボルとしての役割を果たすためにも、巨大な構築物が必要だとしていたほか、旧図書館同様、新図書館も正面はマサチューセッツ・アヴェニューに面することになっていた。

これに対してワイドナー夫人は、まず建築設計責任者として自分と同じフィラデルフィアに住む建築家ホレス・トランバウアを指名し、建物の正面をマサチューセッツ・アヴェニュー側から中庭のほうへ向けさせたのだった。さらに、息子が集めた初版本を陳列する一室を要求した。その外

の点、建物の規模や内部の設計は、委員会提案を受け入れたとされる。ワイドナー夫人の口出しは結果的に今日のハーヴァードヤードを生み出したと評価されている。この巨大な図書館には今日320万冊の本が所蔵されている。

言うまでもなくハーヴァードの図書館はワイドナーだけでなく、ほかに100以上もある。全体の巨大な蔵書数を示す資料はない。ほかの図書館として、例えば、学部学生が最もよく利用するラモント図書館がある。この図書館は戦後初めて建てられた建物としても知られている。東洋の書物を集めて世界に名高いエンチェン図書館はハーヴァードでただひとつ、だれにでも利用できる図書館だ。

そもそもが寄付で始まった大学だから、建物群の大部分が寄付でできていても不思議はない。税金で建てられたものもあるようだが、それはむしろ数少ない。寄付はいくらでも集まるため、ハーヴァードはアメリカで最も金持ちの大学とされている。最近(1998年9月)、豊かな資金を学生にも配分するため、奨学金の拡充が発表された。

ワイドナー図書館のような寄付方式はハーヴァードに限った話ではなく、アメリカの私立大学全体に共通している。

例えばノースイースタン大学スネル図書館だが、これはジョージ・A・スネルが寄付したものだ。このひとはノースイースタンの卒業生で、工学を学び、E・I・デュポン社に就職するが、1943年10月に会社の命令で「マンハッタン計画」に技術者として参加するという経歴を持っている。言うまでもなく原爆製造計画だ。そこで働いているうちに海軍少尉の肩書きをもらい、1946年に除隊になると、建築設計会社を興して成功し、母校へ図書館を寄付することとなる。私はスネル図書館に入るたびに「マンハッタン計画」を連想する。

私がこちらにきて世話になっているもうひとつの図書館、タフツ大学ティッシュ図書館もまた寄付でできている。ここに2千万ドルの寄付をしたジョナサン・ティッシュはテレビ会社CBSの会長で、またローズ・ホテルの所有者でもあり、タフツ大学ばかりでなく、ニューヨーク大学ティッシュ・ホールやメトロポリタン美術館ティッシュ・ギャラリーなども寄付している。息子ふたりが卒業生というのがタフツとの縁だが、この息子た

ちのひとりスティーヴン・ティッシュはハリウッドで名の知れた映画人だ。

こうしたアメリカの寄付方式は日本の私立大学に籍を置くものとしてはなかなか興味深い。明治大学もこれからは個人名つきの建物を寄付してくれるひとを探したらいいのではないか。例えば阿久悠記念ホールなどがB地区にできたらすばらしい。

3

図書館がコンピュータを使ってどんなサービスをしているかは、時勢柄興味深いテーマだ。ハーヴァード大学図書館情報システムはHOLLIS (Harvard Online Library Information System) と呼ばれている。ここにはさまざまなデータベースが入っていて、Older Widener Database もそのひとつだった。だったと、過去形で語るのは、1998年9月2日からこのデータベースはHOLLISでは使えなくなったからだ。その理由は、ハーヴァード大学が1999年夏にHOLLISをリプレイスする計画を立てていて、その移行措置としていくつかのデータベースをHOLLISから取り除いているためだという。Older Widener Databaseを使うには、目下HU INDEXというデータベースを経由しなければならない。リプレイスに関する情報はウェブサイトで開示されているので、念のためここにURLを記しておく (<http://hplus.harvard.edu/dbstrans.html>.)。ここには大学のホームページからも入れる。

従来のイントラネット的システムからインターネットへと図書館情報システムが移行していくのは時代の趨勢だろう。世界のインターネット利用者へ情報を公開していこうという方向性が窺われる。タフツ大学はすでにインターネットへ情報を公開している。図書館の中の検索用コンピュータもインターネットに対応していて、この点がほかの大学と異なる点だ。

さて、ハーヴァード、タフツ、ノースイースタンと3つの大学図書館の検索用コンピュータを利用してみて、もっともユーザーフレンドリーだと思うのは、皮肉なことに、古いシステムのままのノースイースタンのコンピュータだ。キーボードは用意されたメニューのためにしか使えず、大学外のデータベースへはテルネットでアクセスする。しかし、テレビの

チャンネルを変えるような感覚でデータ検索ができるのは、学習に手間取らないぶんだけ助かるのだ。インターネットはまだこれほど簡単な操作になっていない。複雑で便利なものより、簡単で不便なものの方が使いやすいというわけだ。簡単で便利なものが望まれるのは言うまでもないけれども。

(September, 1998. At Cambridge, Massachusetts, USA)